

子育て期における家庭婦人の学習

— 家庭婦人の社会化のために —

本 田 典 子

Learning of Housewives in the Infant-Nursing Period

by

Noriko Honda

はじめに

「女の自立」という言葉が、世論を賑わせている昨今、それは総じて「経済的自立」なくしては、男女平等の社会は築かれぬものとし、あらゆる職場へ婦人の積極的な進出を目標に、「働くこと」を促している。こうした世論に拍車をかけるように、「母親の就労」についての意識も表1の如く大きく変化している。だが、この動きは必ずしも男女平等を前提と考えてのものではなく、結婚をしていない人を含め、女性で仕事を持たない人が就職を希望するもっとも大きな理由が、「収入を得たいから」という実情をみても、豊かさを得るためのものとしての繋がりと、共働き（共稼ぎ）が増加しているといえよう。しかしながら、上述の社会変動の中にあっても、結婚・育児を機に職場から家庭、つまり専業主婦へのコースを辿る女性が、一向に減る傾向を示さないといった事態をも注目すべきではなからうか。とはいえ、表2の「年令階級別労働力率人口」の推移をみてもわかるように、彼女達もやがては専業主婦から有職婦人への可能性を秘めた存在でもある。

表1

母親の就労についての意識「できれば職業につくのがよい」と考える人の割合（％）

		20～ 29歳	30～ 39歳	40～ 49歳	50～ 59歳	全体
夫から みて	41年	13.0	10.1	9.7	11.4	10.8
	54年	24.7	21.0	18.0	18.4	19.5
妻から みて	41年	19.3	15.9	13.9	13.3	15.2
	54年	41.5	30.9	22.9	20.1	27.6

（54年経企庁、41年総理府の調査から）

注 昭和54年11月6日「朝日新聞」から転載。

共働きの増加もいってみれば、専業主婦から有職婦人へという現代婦人の生き方の一つのパターンの表面化による影響がある。経済的自立が、女性にとって望ましい姿であると否にかかわらず、資本主義を基盤とする社会体制であるならば、それがまた男女不平等であるか否かは別として、高度資本主義のもっとも進んだのアメリカ社会に照し合わせても、専業主婦の存在とそのあり方を無視することはできない。総理府が昭和50年に行なった『男女平等に関する世論調査』の中の質問の結果もそれを裏付けているといえよう。「条件がととのえば勤めをやめなくなるか」に対し、勤めをやめなくなる47％、そうは思わない18％、一概にいえない28％、わからない7％である。日本婦人の置かれてきた歴史的背景を考えるならば、勤めることだけが婦人の生きがいといい切れない側面をも有している。専業主婦の問題としてクローズアップされなければならないのは、家庭生活に埋没するがために起る、個人的・社会的マイナス面が、わが国の場合その特

質ゆえにより多く出現していることである。したがって、家庭に埋没する引き金となる可能性のもっとも高い、子育て期の婦人に対する社会的施策、とくに社会との継続的なかわりを保持するための施策は重要な意味を持つものと考えられる。そのためには、社会教育の果す役割が大であり、すでに国立市での報告によっても明らかにされている。

そこで、子育て期の家庭婦人の学習のあるべき姿を、新潟市における子育て期の母親の実態と学習の実態を検討するなかでそれを明らかにしてゆきたい。

尚、全体を通してバンビの会、新潟女性史クラブの各メンバー共同で実施した、「子育て期の母親の生活と意識」と題する調査を基に論じて行くことにする。この調査は筆者の指導により行なったものであるが、何分調査に不慣れなメンバーばかりであったため、回収時の不手際によって、より深い分析を試みることができなかったことを残念に思うものである。

表2 年 令 階 級 別 労 働 力 率 人 口 (%)

			総 数	15～19歳	20～24	25～29	30～34	35～39	40～54	55～64	65以上
総 数	労 働 力 率 (%)	昭和35年	69.2	50.8	79.0	74.3	76.4	76.0	74.4	66.4	39.8
		40	65.7	36.1	78.0	72.6	74.1	78.2	76.8	65.3	37.1
		45	65.4	32.5	75.6	71.2	72.9	77.6	78.4	64.2	31.8
		46	65.0	31.2	75.4	70.3	71.8	76.8	78.0	64.4	30.4
		47	64.4	28.0	74.3	70.1	71.8	76.8	78.0	63.2	29.3
		48	64.6	26.5	73.3	70.7	72.4	77.3	78.6	63.7	29.8
		49	63.6	23.8	71.7	70.0	71.5	76.4	78.1	62.9	28.7
		50	63.0	21.2	71.0	69.7	70.9	76.0	77.9	62.7	27.9
女 子	労 働 力 率 (%)	昭和35年	54.5	49.0	70.8	54.5	56.5	59.0	59.0	46.7	25.6
		40	50.6	35.8	70.2	49.0	51.1	59.6	60.2	45.3	21.6
		45	49.8	33.6	70.5	45.6	48.2	57.5	61.8	44.4	18.0
		46	48.8	31.7	69.1	43.3	46.2	55.8	60.9	44.8	16.6
		47	47.8	28.5	67.4	43.0	45.7	55.4	60.8	43.6	15.5
		48	48.2	27.9	67.1	44.5	46.7	56.3	61.3	44.4	16.9
		49	46.6	24.0	65.6	43.4	44.8	54.7	60.4	43.7	15.8
		50	45.8	21.8	65.7	42.6	43.9	54.0	60.0	43.6	15.4
男 子	労 働 力 率 (%)	昭和35年	84.8	52.7	87.8	95.5	96.6	96.2	95.9	85.6	56.9
		40	81.7	36.3	85.8	96.8	97.0	97.1	96.3	86.7	56.3
		45	81.8	31.4	80.6	97.2	98.0	97.8	97.0	86.8	49.4
		46	82.2	30.6	81.3	97.5	98.1	97.8	97.1	87.2	48.0
		47	82.1	27.4	81.1	96.9	97.9	97.9	97.0	86.3	47.0
		48	82.0	25.2	79.5	96.8	98.3	98.2	97.3	86.6	46.7
		49	81.7	23.6	77.7	96.4	98.3	98.0	97.2	86.3	45.8
		50	81.3	20.5	76.1	96.2	98.2	97.9	97.0	86.1	44.6

1 子育て期の母親の実態（調査結果の分析）

① 調査方法と対象

新潟市中央公民館を場として、活動する、3才前後の母と子の学習の会「パンピの会」、及び女性史を学習する婦人の会「新潟女性史クラブ」の両会会員周辺の3才以下の子をもつ母親に対し、質問紙を配布し記入をしていただいた。

② 調査期間

昭和54年9月25日～10月5日

③ 回収結果

配布数 501, 回収数 473 (94.4%)

④ 調査結果と分析

○ 年齢構成

表3

20代	189	40.0
30代前半	232	49.0
30代後半	44	9.3
40代	7	1.5
回答なし	1	0.2
計	473	(100.0)

子育て期とは、出産からいつ迄をもって子育て期と定義するかは、それぞれの見解に相違があるので、ここでは幼稚園・保育所の就園との関係で、3才以下の子を持つ時期とした。

子育て期にある母親のうち89.0%が、20代から30代前半のもっとも活動力に満ちた年代にいる。したがって、こうした柔軟で活動力のある年代だからこそ、家庭に埋没せず、何等かの活動ができるよう、社会が配慮する必要がある。

○ 家族構成

表4

核家族	359	75.8
複合家族	111	23.5
夫なし	2	0.4
回答なし	1	0.2
計	473	(99.9)

核家族75.8%で、一般的水準より可成り高いが、これは調査方法に多分の片寄りがあると想定されるので確証性がうすい。しかしながら、このように高い核家族率であるならば尚一層、家庭にある子育て期の母親について考えねばなるまい。

○ 共働き経験の有無と職業の有無

表5 共働き経験

有	179	37.8
無	276	58.4
回答なし	18	3.8
計	473	(100.0)

表6 職業の有無

有	118	24.9
無	341	72.1
回答なし	14	3.0
計	473	(100.0)

共働き経験者37.8%のうち、何等かの理由でその後退職したものが約13%にのぼる。専業主婦が72.1%もあり、子育て期の就労の困難さがうかがえる。

○ 母親の生活の状況

問「あなたの生活は一言で云うと次のどれに近いですか」

表7

子どもの世話・家事 33.4%	無回答 0.6%
努めて自分の時間を作っている 60.9%	5.0%
自分優先	

子どもの世話、家事に埋没している母親が33.4%でやはり高い。核家族の場合、子育て期であっても自由な時間をもとうとすればできる状況にあるとしている。

○ 日常生活に対する満足度

問「あなたは今の生活をどのように感じていますか」

表 8

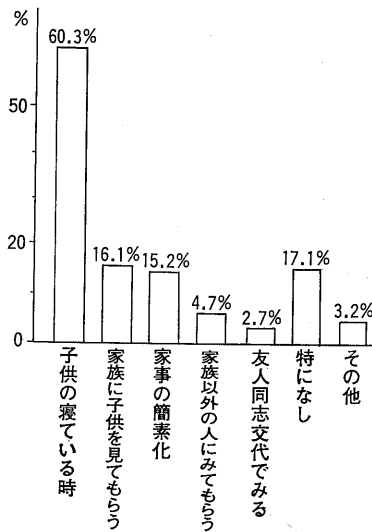
		満足している 56.4%	あせりや不安を感じている 29.8%	不満 11.8%	無回答 1.9%
理 由		問 あなたの生活は一言で云うと………			
		家事育児に専念 (33.4%)	育児の傍ら自分の時間を持つ (60.9%)	自分仕事優先 (5.1%)	
問 今の生活をどのように感じているか	満足している 56.4% (267人)	①子育て期での母親の役割は重要であり、子供の手が離れたら自分のやりたい事をやる。 ②子供を育て家庭を守るのも一つの仕事である。 ③子供の成長をみるのが喜び。	①育児に追われながらも、自分の時間を持つように努め前向きに生きる努力をしている。 ②健康である。 ③家庭が円満で経済的にも安定している。	完全に満足しているわけではないが、焦りや不安を感じるほどでもない。	
	あせりを感じて不安 29.8% (141人)	①自分の時間がない。 ②社会や他人から取り残されるのではないか。 ③子育て後、自分がどう生きるかという将来に対する不安がある。	①社会や他人から取り残されるのではないか。 ②子育て後の自分の将来の生き方に不安がある。 ③職業を持ちたいが出来ない。	①仕事も育児も中途半端である。 ②自分の時間が欲しい。	
	不満 11.8% (56人)	自分の時間が欲しい。	①自分のための時間が欲しい。 ②将来の自分が不安。 ③思うように外出できない。	子供や家庭のための時間がない。	

子どもの世話に明け暮れている生活に「満足している」と答えている人の多くは、子育ては母親の役割ないし当然と考え、現状を仕方がないとし「子どもの手が離れるまで」の期間、子育てに楽しみをもとうとしている。また、家事・育児の中で努めて自分の時間を見つけて前向きに生きている人の多くは、経済的に恵まれた立場にある人だといえる。したがって経済的に恵まれてこそ、育児・家事をゆとりあるものとしている。自分のことや、仕事を優先とする人、またはせざるを得ない人は、なお一層時間に追われていて、育児や家庭生活が中途半端である悩みを訴えており、この時期の母親が育児からのがれられない状況を露呈するものに他ならない。この時期の専業主婦は、育児終了後の将来に対していいようもない不安感をいだいているということになる。たとえ育児からのがれられない状況であっても、将来につながるべき学習を身につけなければ、この不安を消すことができないのではなかろうか。

○ 自分の時間をもつ工夫

問「自分の時間をもつためにどのように工夫していますか」

表9



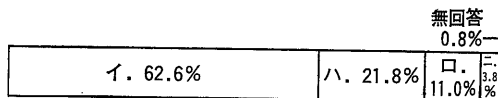
子どもの寝ている時と答えた人が60.3%と他を圧している。核家族が多いにもかかわらず、家族以外の人や友人同志交代でみるといった工夫が低く、全般的に特に何も工夫をしないも含め、家庭内で閉鎖的・受動的な時間を工夫しているに過ぎず、ここにも埋没している家庭婦人像をみることができる。

・自分の時間の過ごし方

問「あなたは自分の時間をどのように過したいですか」

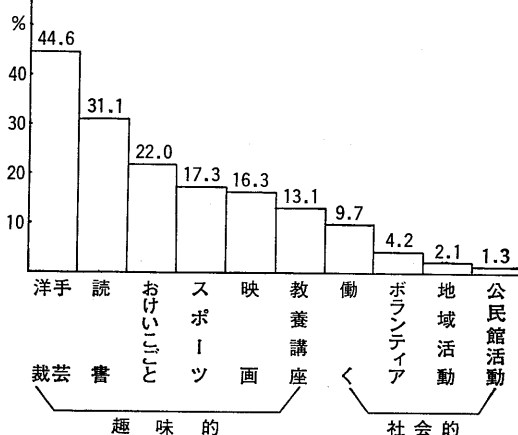
「具体的にはどんなことをしたいと思いますか」

表10



- イ 自分の好きなことをやって、できるだけ楽しくすごす。
 ロ それまでの育児や仕事の疲れを休め、力をたくわえる。
 ハ 自分を高めるために使う。
 ニ その他

表11



育児という重大な社会的責務を負った母親達は、細切れにしかない時間を、好きな事をして楽しくすごし、疲れを休め、フラストレーションの解消をはかるため、洋裁・手芸・読書など趣味的・教養的な社会性の乏しいものをもとめる傾向が強い。スポーツ塾・文化教室の普及もあり、この方面での希望も多い。働きたい人やボランティア

等の社会的活動への関心は、全般的に非常に低率である。

・教養娯楽費

問「あなたのための教養娯楽費は1カ月どの位ありますか」

表12

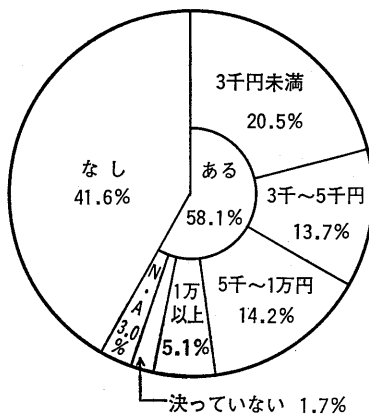
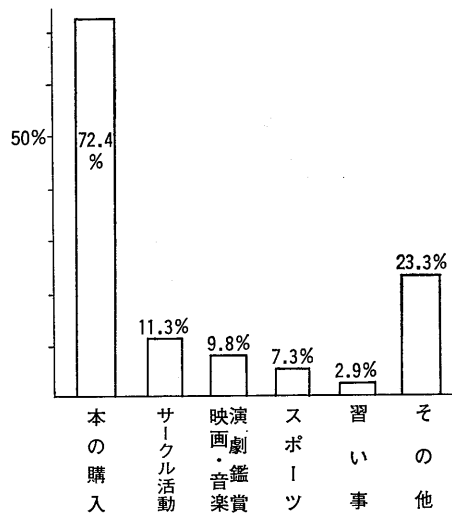


表13



半数以上の人があるための教養娯楽費を持っており、その額は3千円前後というものが3分の1である。その用途は、大部分を本の購入にあてており、子どもを寝かせてからの時間を利用するための、もっとも有効な手段となっているのであろう。家庭外の活動をしている人ほど、金額が高くなっている。経済的なゆとりなくしては、これらの活動がしえないというのであれば問題である。教養娯楽費を全く持っていない人が41.6%と可成り高率となっている。専業主婦の場合、全体を通じて家事・育児をやっているということ自体、マネージしているとか、クリエイティブなものであるとかさらに夫のため家族全体のため、私がこれを負わなければ家族全員の再生産ができないのだというように、それら全体に対する生きがいもなっている。自分のために使うことなど考えないか、あるいは使うことの後ろめたさを感じているということもあるのではなかろうか。

以上、子育て期の母親の生活の実態をみてきたが、核家族化の中にあっては、生活に満足、不満足の違いはあれ、現状の生活を肯定しつつも、家庭に埋没することの不安をどうすることもできないで、とまどいながら日々明け暮れている様子が見えがわかった。しかし、妻にとって夫の大病、死さらには離婚という不幸と無縁ではない。子どもの成長と共に自分の時間を見出し、自分を高めるための時間を使うゆとりが出て来るとはいえ、心と身体の柔軟な時に経済的自立をはばまれ、社会参加から締めだされることは、たいへんなマイナスである。たとえわずかな時間であっても、自分の時間をもつことができるとなれば、母子双方のために、健全で開かれた育児期でなければならない。そのためにも直接子育てにあたる側はいうに及ばず、社会からの協力がとくに必要となっている。したがって、つぎに子育て期の母親の社会参加・学習の実態をつかむとともに、社会教育の現状について述べることにする。

2 社会参加と学習意欲（前掲の調査より）

・社会参加及び学習の参加

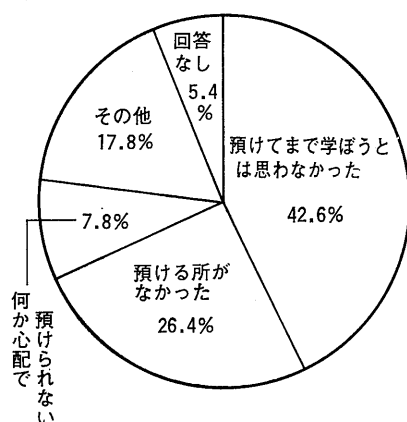
問「子供連れで催しものや集まりに参加したことがありますか」

「参加したことの無いのはなぜですか」

表14

ある	45.5%	ない	54.5%
----	-------	----	-------

表15



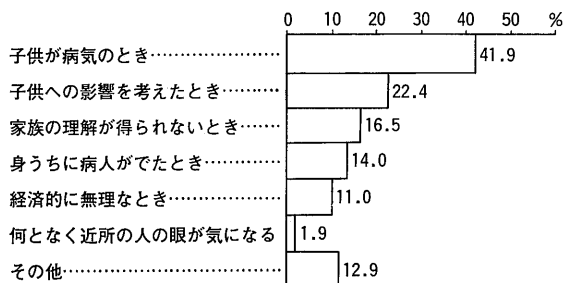
子どもを連れて参加したことのある人が45.5%で、何らかの形で社会との関りを持とうと試みた意欲がうかがわれると同時に、こうした場が全くないことではなく、参加して行く中で拡大できると思われる。

参加したことのない(54.5%)人のうちの半数近くは、育児に専念し、家庭の中で満足している。また子と密着状態で、参加するゆとりすらない。預けるところがなかった26.4%の人は、保育室等の状況さえ完備されていれば参加する可能性のある人とみてよい。共働きの人の場合は、参加を考えるとすらできない厳しい状態がうかがえる。家事・育児に追われていて、社会参加など考えもつけないという、意識の低さが全般的に目につく。

。意欲のそがれている原因

問「あなたが催しものや集まりに参加しようとする意欲をそがれるのは、どんな時ですか」

表16



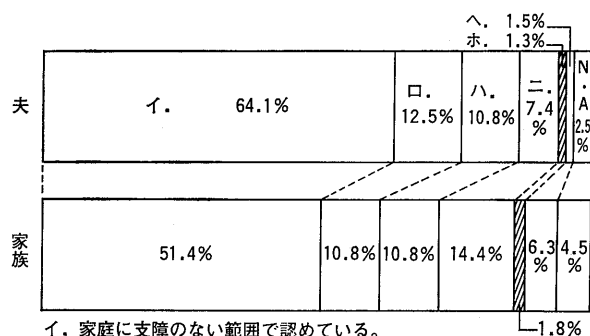
核家族で、同居の祖父母、年上の子の手助けが得られないばかりか、日頃閉鎖的になっているためとなり近所とのつき合いも薄く、親戚とも日常的な親しみが無いのであろうか、子どもの世話等を一手に背負って、身動きができない事情が、この理由をみても明らかである。「主婦は家の中に」という考え方に変化が

あるとはいえ、家族の理解の低さがこの数字にも表われている。何となく近所の人の眼が気になるものが1.9%とわずかだが、「子育て期にはせめて家庭に」との従来の考えにもよるものであろう。

。社会参加への周囲の理解

問「あなたが催しものや集りに参加するために外出することを夫や家族(舅・姑)はどのように考えていると思いますか」

表17



イ. 家庭に支障のない範囲で認めている。

ロ. 活動内容によっては、認めたり、反対したりする。

ハ. 全面的に認めている。

ニ. 干渉しない

ホ. 全面的に反対している。

ヘ. わからない。

「家庭に支障のない範囲で認めている」以外は、夫と家族の考えはほぼ同じである。直接的、間接的影響の受け手の違いという程度であろう。ところで、家庭に支障のない範囲で認めているということであるが、家庭に支障を及ぼす範囲は、その時の状況に応じ、またその家庭に応じて差があるので、一概に現代の主婦は自由に行動でき

るようになったといい切ことは危険である。ロ「活動内容によっては、認めたり、反対したりする」あるいは、ハ「全面的に認めている」の割合が高くない限り、子育て期の母親の社会参加への明るい見通しがでてきたとはいいがたいものがある。

○子育て期の母親の学習（バンビの会の場合）

バンビの会は、昭和53年11月新潟市中央公民館主催の「母と子の集い」に参加した中で子どもを連れて学びたいという主婦数名から出発し、現在母、子各15名の自主サークルである。筆者は、当初から講師に招かれた縁で、その後も助言者としてかかわっているものである。

会の概要を記すかわりに、会則、学習内容をつぎに掲載して置くことにする。

会 則

◎会の名称はバンビの会とする。

◎会員は子供を持つ母親と、子供によって構成される。

◎この会は、市中央公民館主催の母と子の集いから出発し、子供を持ちながら学習活動を行い、母親と子供のより向上をめざすものである。

◎会の運営は、役員と相談し、月当番の責任を持って例会の進行を計る。

◎役 員 会 長——会の代表者

会 計——会費の扱い、3月末会計収支報告

※役員の任期は1年間（4月～翌3月まで）とし、3月末に全員の選挙により決定する。

◎月 当 番

仕事内容——議事録（会誌）の作成記入

例会の準備、進行を計る

会員への連絡等

◎会 費 1 か月2,000円（子供2人の場合2,500円）

※会費は、月末に翌月分を会計に支払う。

※前もって翌月1か月欠席することがわかっている場合、会費は半額とする。

※保育者には保育料として会費より、月16,000円を支払う。

◎連絡方法

※月当番が名簿1番に連絡、次から順に連絡する。

※欠席の場合、欠席者は月当番へ、欠席すること、次回での意見をそえて、電話等で必ず連絡すること。

※欠席者は、例会の終了後、例会の内容、次回の議題等を確認する。

学 習 経 過

	学 習 内 容	備 考
54年1月	何を学習するか討論	この時点で保母決定 学習内容決定 講師 中学校教頭
〃	何故子連れで学ぶのか	
	その為の保育をどうするか	
5 月	新会員の受入れについて	
6月5日	植木枝盛が生きた時代	
12日	読書会「婦人女子将来の天地」	
19日	〃 「男女及び夫婦論」	

	学 習 内 容	備 考
26日	保育について考える	相互学習
7月3日	近代に生きた女性石川啄木の妻をめぐって	講師 高校教員
10日	読書会「日本人家の思想」	
17日	〃 「婚姻論」	
24日	保育について考える	相互学習
8月7日	課外研修, 1泊旅行	子と共に
8日	(六日町)	
9月4日	女性史クラブ・パンピの会交歓会	共同で調査を実施する(決定)
11日	調査のための設問事項の完成	
18日	アンケート用紙の印刷及び配布	
25日	〃 収集	
10月5日	〃	
9日	アンケートの集計	
15日	結果の分析とその文章化	} 共同作業の予定がこの日までであっ } たため, どうするかについて討論
22日	〃	
29日	文化祭のためのパネル製作	
11月6日	共同調査の反省会	
13日	調査の結果を会以外の方と話し合う	
20日	今後の学習のしかたについて討論	
27日	〃	

育児期の母親を対象とする会の問題は、終始保育の問題であるといっても過言はない。このため、この会の母親は、何故こんなにまでして学習をしたいと思うかをテーマに、話し合い、レポートし、自問自答したりで、今日までも母親達の学習と同時にこの問題に時間を費すものとなっている。現在会の学習の場となっている公民館に、本年7月より専用ではないが、一応保育室を確保できたことで、それまで会場としていた「青年の家」から移ることになった。しかし、部屋が狭いこと、戸外遊びが困難等問題は多々ある。保育施設の欠如は、子育て期の母親の学習を防げ、グループを発展させる限界にもなっている。また母親側のもつ悩みでもあるが、この会が3才前後の子をもつ母親としているため、第2子が乳児の場合、保育の世話を受けられないことであろう。子どものためにも、母親のためにも保育施設はいうに及ばず、保母の確保も重要となって来る。現在乳児を連れて来る会員は1人であるので、当分の間学習の場に置くことにしている。15名の幼児に対し、資格をもった保母、幼児教育を専攻しているボランティアの学生3名、計4名で保育室を担当している。人数的には恵まれているものの、学生ボランティアがかけた場合の補充に問題がある。その他会を運営するための助言者の問題で、現在短大教員、公民館主事、他サークルのベテラン会員の3名が常時その指導についているが、今後この面にも、人的資源の開発を必要とする。会員の意欲は、親しい知人をもてないでいた県外出身者が殆んどであるため非常に意欲的である。転勤族もおり地域との関連づけを積極的に展開していかなければ、自分のためのみの学習になりかねない。

以上の点からも、子育て期の母親の社会参加や学習は、母親の意識の目覚めと同時に、周囲の人々及び公的機関の協力なしでは、ともすると家庭に埋没しがちな子育て期の母親を、社会的存在としてくみ入れていくことは容易ではない。バンビの会と共に歩んで、未だ一年にしかならないが、確実にその成果が現れているのを見ると、この時期の女性を家庭のみに止まらせて置くことが、如何に個人にとっても社会にとっても大きなマイナスであるかが現解できよう。経済的自立を促す前に、学習・社会参加することを勧めることこそ、安易な気持ちで働くことを求め、もつことを防ぐものとなりえよう。

注 会員のうち3名が、地域でバンビの会と同様のグループを結成。(母と子と共に保育を、英会話グループ、子ども会グループ) 助言者の1人である、女性史サークルの方が、女性史のグループを地域で結成。会員1名が、自分を職場で生かそうと、保険会社へ就職。

3 社会教育の中の家庭婦人の学習(新潟市の公民館事業の場合)

新潟市における社会教育事業は、公民館を中心とする活動といえる。そこで、公民館事業の中での婦人教育の実態をみることによって、その問題点を指摘しておきたい。

新潟市には、中央公民館を柱に18の分館がある。それらの公民館が実施する婦人教育事業には、つぎの如くである。

○昭和54年度事業計画(婦人の部)

中央公民館

第28回 婦人大学講座 第29回	6月～7月	地域における婦人の役割
	9月～3月	国際理解
ゆりかご学級	5月～3月	乳児期の教育
通信教育0才通信	通 年	0才期のしつけ
中学生期の家庭教育	9月～12月	中学生期的人格形成と環境

南部分館

南部婦人学級	4月～8月	良寛文学について
押 絵 講 座	10月～12月	押 絵
紙 人 形 講 座	6月～8月	駒子の紙人形

江東分館

婦人趣味講習会	5月	籐工芸
---------	----	-----

山の下分館

くらしの工夫講習	6月,9月,12月	くらしの豆知識
七宝焼教室	6月～7月	七宝焼
山の下中央婦人学級	6月～2月	歴史を生き抜いた女性
婦人料理教室	6月～12月	生活技術
アートフラワー教室	9月～10月	手づくり花
紙人形作り教室	10月～11月	人 形
婦人グループリーダー研修会	2月	リーダーの役割

木戸分館

生活実務講習会	9月～11月	くらしの豆知識
茶道教室	9月～11月	茶道の基本

大形分館

岡山若妻集会	5月～12月	一般教養・生花
趣味教室	7月～10月	籐細工・リボンフラワー
生活技術講座	11月～2月	料理・着付
婦人講座	11月～3月	一般教養

石山分館

石山中央婦人学級	6月～11月	反骨の女達
清五郎婦人集会	随 時	一般教養・生活技術
長 湊 婦 人 集 会	〃	〃
趣 味 教 室	〃	パンフラワー
	〃	パッチワーク
	〃	七宝焼
婦人健康教室	4月～6月	食生活・精神衛生・体操
着 付 教 室	4月～6月	着物の着付
読 書 会	6月～10月	子どもに読ませる本
婦人学習グループ交歓会	6月・2月	交歓・レクリエーション

大江山分館

家庭教育教室	6月～10月	子供のしつけ、子供の生活
民 踊 教 室	5月～9月	郷土の民踊

内野分館

生 活 講 座	6月～10月	生活に必要な知識・技術の習得
婦人ギター教室	6月～10月	ギターの基本
子供の読書を考えるつどい	10月	子どもの本と読書のあり方を考える
書 道 教 室	6月～10月	書道の基本
ママさんスポーツ教室	6月～3月	ソフトボール教室

赤塚分館

婦 人 講 座	4月～3月	着付、生花、民謡
赤 塚 学 習 会	12月～2月	明るい家庭作り
木 山 学 習 会	〃	豊かな生活

中野小屋分館

中野小屋地区婦人学級	5月～3月	一般教養, 趣味
〃 若妻学級	〃	〃
料理教室	10月～3月	手軽な家庭料理
中野小屋文化教室	6月, 9月	ふとんづくり, ふすまはり
	6月～10月	ダンス, 民謡

坂井論分館

婦人学級	5月～3月	一般教養・生活技術・家庭管理
婦人学習集会	〃	〃
若妻学習集会	〃	〃・育児
婦人交歓学習会	2月	団体・グループの交歓
婦人スポーツ教室	5月～3月	リズム体操, 民謡, ダンス
婦人球技大会	5月・9月	バレー・卓球・庭球・バドミントン

曾野木分館

曾野木婦人学級	4月～3月	一般教養・家庭管理
曾野木若妻学習会	4月～3月	一般教養・文集発行
バレーボール教室	随 時	バレーボールの基礎
趣味の教室	4月～10月	生花・手芸
曾野木若返教室	4月～10月	軽スポーツ, ダンス

両川分館

両川婦人学級	4月～3月	一般教養, 生活技術
趣味の教室	〃	茶道, 華道, ダンス
料理教室	〃	栄養のある家庭料理

松浜分館

美容健康教室	5月～3月	テニス・卓球・体操
婦人リーダー研修会	5月～7月	リーダーの役割とグループ運営

濁川分館

婦人リーダー研修会	5月・2月	リーダーの役割, 情報交換
地区巡回婦人学級	5月～3月	一般教養, 生活技術
地区若妻学習会	〃	明るい家庭づくり
趣味実務教室	随 時	生花, 手芸, 茶道
おそうざい教室	5月～3月	栄養の基礎知識, 季節料理

南浜分館

地区別婦人集会	4月～3月	一般教養及び生活技術
料理教室	5月～3月	栄養の知識と調理実技
手芸教室	5月～3月	籐工芸、ペーパーフラワーの実技
家庭生活の実務講座	11月～2月	和服の着付
健康教室	6月～12月	婦人の若返り
婦人リーダー研修会	6月	団体の運営技術

表18

婦人教育実施上の努力事項

ねらい	現状の問題点	必要と思われる対策
主体的価値観をもって生きていくことのできる（自立した）婦人の育成をはかる。	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 婦人をとりまく生活環境を深く認識する学習会が少ない。 ◦ 自己表現を積極的におこなっていく学習活動が少ない。 ◦ 気軽に参加できる楽しい雰囲気の学習会・集いが少ない。 ◦ 就労婦人が多いにもかかわらず、働く婦人の問題を考える講座が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 対象者により同じ主題でも学習方法や学習形態を変化させる。 ◦ 主体的に学ぶ姿勢を身につけるために学習時にはできるだけ発表や討議の場を多くとり入れる。 （書くこと、話すことを積極的におこなう講座・学習会の開設） ◦ 学習することが楽しいというイメージを与えることのできる主題の設定や学習形態のくふうをしていく。 （サロンの学習会・集いの開設） ◦ 就労婦人が参加しやすい日時を選んで開設し、就労婦人がかかえている職場・家庭の問題を気軽にだしあふる場を設定する。

婦人教育事業をしていない公民館は、2カ所ある。中央公民館を除く他は、趣味講座が殆んどで、直接学習教育に結びつく活動に乏しい。このため、参加者の結びつき、組織化に程遠い状態である。この点について、表18の「婦人教育実施上の努力事項」の中で、この点について触れているにもかかわらず、本年度の事業とくに分館事業にそれへの対策がたてられていない。婦人教育事業のねらいが、「主体的価値観をもって生きていくことのできる（自立した）婦人の育成をはかる」となっているが、短期間の学習ではリーダーとなる人を見出すまでもいわず、もって「自立」をめざすには余りにもおそまつ過ぎはしないか。このねらいを達成させるには、思い切った人的資源の開発をしなければ、組織化は困難である。筆者は、「ゆりかご学級」「家庭教育学級」の顧問として経験を重ねる度に痛感させられる。やはり保育施設がないところでは、子育て期の母親の学習を深めることができないばかりか、その芽さえつみとることになる。

あ と が き

家庭にある子育て期の母親は、一方では賃労働者としての予備軍でもあり、他方では社会的活動の有力な資源とも考えられる。したがって、この時期の学習体験をのがしては、女性の自立もあやぶまれる。彼らの学習は働く婦人に対する政策と同様、重要なものとして位置づけられねばなるまい。

注 1

離 職 理 由 の 推 移 (%)

		計	契 約 期 間 満 了	経 営 上 の 都 合	定 年	本 人 の 責	個 人 的 理 由	う ち 結 婚	う ち 出 産 ・ 育 児	そ の 他
女	昭和45	100.0	5.1	3.9	0.4	1.7	87.0	21.8		1.9
	46	100.0	4.8	4.5	0.6	1.7	86.4	23.9		2.0
	47	100.0	4.7	3.4	0.5	2.2	87.3	25.1		1.9
	48	100.0	3.7	2.4	0.4	1.8	89.9		26.3	1.8
	49	100.0	4.3	8.1	0.8	2.5	82.1	25.8		2.2
	50	100.0	5.4	8.5	1.0	2.5	80.4	25.2		2.1
男	45	100.0	5.6	4.7	2.7	4.1	79.9			3.0
	46	100.0	5.9	6.2	2.9	3.6	78.0			3.4
	47	100.0	5.8	4.8	3.6	4.8	77.8			3.2
	48	100.0	5.9	4.3	2.6	4.8	79.2			3.2
	49	100.0	6.8	7.7	3.3	4.8	73.6			3.9
	50	100.0	5.4	12.7	4.4	5.4	68.9			3.2

労働省一雇用動向調査

注 2 国立公民館主事伊藤雅子氏を中心になされている主婦の学習に関する試み。

参考文献及び資料

- ・田中・日高編「婦人政策・婦人運動」（現代婦人問題講座1）亜紀書房，1969。
- ・大羽・氏原編「婦人労働」（同上2）亜紀書房，1969。
- ・一番ヶ瀬・小山編「家庭と社会」（同上4）亜紀書房，1969。
- ・羽仁・小川編「婦人の学習・教育」（同上5）亜紀書房，1970。
- ・山手茂「現代日本の婦人問題」亜紀書房，1970。
- ・伊藤雅子「子どもからの自立」未来社，1975。
- ・河合・藤田・小嶋共著「母なるもの」二玄社，1977。
- ・大和・桑原訳「家庭と職業」ミネルヴァ書房，1968。
- ・婦人に関する諸問題編「現代日本女性の意識と行動」大蔵省印刷局，1974。
- ・労働省婦人少年局編「婦人労働の実情」大蔵省印刷局，1976。
- ・日本婦人団体連合会編「婦人白書1979」草土文化刊，1979。
- ・地域社会研究所編『コミュニティ』35「主婦の生活時間」国勢社，1973。
- ・地域社会研究所編『コミュニティ』17「家庭婦人の学習」国勢社，1968。